

# 海上の森ミニセミナー第10回 「里山の森をつくる “これまでの10年、これからの10年” ～NPO 法人海上の森の会 森づくりグループの取り組み～

話題提供者：大澤 秀文 氏（NPO 法人海上の森の会）

## ①お話し

### ◆これまでの10年



NPO 法人海上の森の会 森づくりグループのこれまでの10年（2005年～2015年）を振り返る。

森づくりグループは2005年に発足し、翌年の2006年にヒノキ1.7ha人工林（里山サテライト南）の森づくり構想を確定させ、本格的間伐作業に入った。2009年企業連携、2010年森の教室も開始した。そして2013年には森林山村多面的機能発揮事業も開始され、

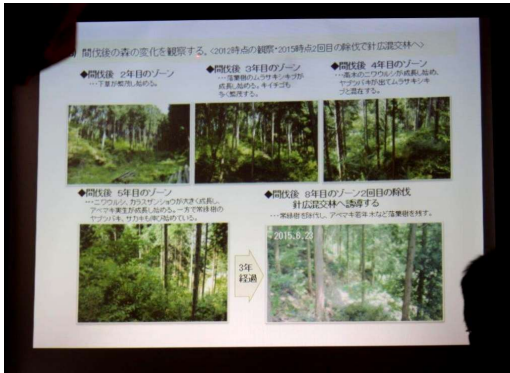
10年経過した2015年にヒノキ1.7ha人工林の間伐作業が完了した。

### 1. 2006年ヒノキ1.7ha人工林の森づくり構想

2006年ヒノキ1.7ha人工林の森づくり構想は、7つのゾーンに区分し、ヒノキと広葉樹の針広混交林、高木～低木のある複層林とし、少しでも多くの生きものが棲むことができ、里山の水源を守る、きれいな森に仕上げることを目標とした。おすすめ方は7つのゾーンそれぞれに特徴を持たせ、①～⑥ゾーンでは通常間伐、⑦ゾーン北面では景勝を重視（ヤマザクラ・ウワミズザクラの落葉樹とヒノキによる緑のコーディネーションを演出）した間伐、⑥ゾーン南面では巻き枯らし間伐、⑤・⑥ゾーンの沢では皆伐による植生観察、⑤ゾーンの尾根ではアカマツの保全を行うとした。



## 2. 1.7ha 人工林の作業を実施してきたこと、そして見えてきたこと



●1.7ha 人工林の作業を実施して、さまざまなことが見えてきた。ゾーン別に間伐作業を実施していると、作業前後の違いが分かり、達成感とやりがい感を醸成できるうえ、間伐作業後の変化を年度ごとに観察することができること、そして山を荒らさず、安全・安心のための作業路を早くから造ることが重要であること、などである。

●間伐後の森の変化をみると、間伐後2年目で下草が出はじめ、3年目で落葉樹のムラサキシキブが成長し、キイチゴも多く繁茂する。4年目ではじめに出るニワウルシが成長しはじめ、常緑樹のヤブツバキ、サカキとムラサキシキブが混在、5年目でニワウルシ・カラスザンショウや常緑樹のヤブツバキ・サカキもさらに伸びはじめ、一方でアベマキの実生が暗くなりかけているなどが見えてきた。よって8年目の1ゾーンは2回目の常緑樹を中心とした除伐を行い、アベマキの若年木など落葉樹の成長を促がしていくこととした。

●海上の森里山サテライトの庭の正面にあたる景勝を重視した⑦ゾーンでは、2009年の診断時にヒノキが2000本/haと周りにサクラの若木のある森であったが、そのサクラの若木に陽を入れるためヒノキ強度間伐をすすめ、8年目にヤマザクラ樹々の成長で満開が見られるようになった。

●⑥ゾーン南面の花崗岩の落石した危険な場所では、巻き枯らし間伐を実施し、巻き枯らし間伐の説明を添えた立ち入り禁止看板も製作・設営した。現在問題もなく、下草、低木が育ち落石も起きていない。

●間伐材の活用については、ため池の橋脚に使用し、急峻な場所（傾斜25度～45度）では間伐材土留めを何段も実施し土砂崩れや土砂流出を防ぎ、間伐材土留めと土嚢で土砂崩壊を補修している。

●里山にとって大切なテーマの1つに、「暗くなった森からいかに多くの生きものを呼び戻す」ということがある。施業後、結果として③・④ゾーン北面にコアジサイの群生が発生、⑤・⑦ゾーンではウワミズザクラが満開、⑤ゾーンの尾根の枯れかかったアカマツの再生によりマツボックリの実を食べにくるリスが増えた。などのうれしい話題である。しかし、一方これらの保全が課題になっている。

## 3. 森林・山村多面的機能発揮事業（国の助成）を始める（2013～2016）

国の助成を受け、侵入竹林の皆伐に挑戦した。侵入竹林は山の崩壊を誘発するため、夏に皆伐を実施したが、その後同様作業を数年実施しないと元に戻ってしまう。初めから計画的に皆伐を実施する必要があった。

教育・研修活動としては「森の教室」を実施した。2010年からおよそ90人が伐倒などの間伐体験をしたほか、参加者による丸太ベンチを7台制作し、物見山山頂付近、里山サテライトに設置し、海上の森の憩いの場となっている。

また、林野庁主催の森林・山村多面的機能発揮事業全国普及セミナーに全国4団体に選出され、海上の森での活動事例発表を行った。

#### 4. 企業連携（企業の間伐作業）への支援・指導を実施する（2009年～）

海上の森での企業連携による間伐は、大きな成果を生んでいる。2014年～2016年にかけて、株式会社伊藤園、カルビー株式会社、小林クリエイト株式会社、有限責任監査法人トーマツ、株式会社豊田自動織機、株式会社ナゴヤキャッスル、CKD株式会社との企業連携において、年間延べ200人程度の参加者に対し、20人程度の指導員を森づくりグループから出している。また、企業内において、海上の森の間伐作業を社会貢献・福利厚生に活かしている。

#### ◆これからの10年



これからの10年は、2016年～2025年における5.66ha（海上の森「ふれあいの里」区分内ヒノキ人工林とヒノキと広葉樹の混交林）での施業となる。

プロジェクト未来遺産2016に登録（日本ユネスコ協会連盟）された海上の森の会「海上の森・保全活用プロジェクト」としての役割とあいち海上の森センターの「海上の森保全活用計画2025」を基本に、2016年～2025年「2016里山の森『5.66ha』森

づくり基本構想」森づくりグループの取り組みが作られた。

この基本構想は、当面あいち森と緑づくり事業2017の助成を受けた「愛知万博記念の森海上の森健全化10年プロジェクト」としてすすめる。

##### 1. 2016年里山の森「5.66ha」森づくり基本構想

海上の森保全活用計画2025の森林計画を基本とした間伐・除伐などの整備を実施し、現状の5.66ha内樹木を活かしながら、生物多様性の維持、そして景観の良い里山の森をつくる。5.66haの北～西エリアは、経年ヒノキ（大木）を交えた落葉広葉樹を中心に景観の良い二次林に仕上げ、一部体験学習のフィールドを設ける。南～東エリアは、ヒノキ・スギ

の強度間伐をすすめ、針広混交林の森に誘導していく。

## 2. 里山の森「5.66ha」具体的な森づくりのすすめ方 ～1.7ha 作業からの経験を活かす～

5ゾーンに分けて、ゾーン別の「森の診断」をし、ゾーン毎の目標めやすを設定する。それらの活動を順次すすめながら達成感ややりがい感を継続していく。

次に、安全・安心作業を第一に考え作業路を確保し、湧水・みず路を確認し、土砂崩壊、土砂流出状況を調べる。

これらの作業は、当面あいち森と緑づくり事業としてすすめる。また、同時に 1.7ha 人工林を針広混交林に向けた作業を計画的に実施する。

## 3. 5ゾーン別 現状と2016年森づくり構想

①～⑤ゾーン別にヒノキ人工林、広葉樹植生、地質、土砂流出など診断結果の現状を踏まえ具体的にゾーン別の2016年森づくり構想を作成した。

③～④ゾーンの一部には、ヒノキ大径木とヤマザクラやコナラなど配した体験学習フィールドを整備し、森林環境教育の活用が図れるよう検討していく。

⑤ゾーンはアカマツ林の名残があるが、アカマツはほとんどなく、残るアカマツの保全を試みる。

## 4. 里山の森「5.66ha」森づくり開始してこの1年

広葉樹中心の景勝林へ仕上げることを目標とした①～②ゾーンの北面（里山の田畑側）を、この1年間間伐・除伐作業を実施した。

カシノナガキタイムシによる枯れた大木やフジつるが巻きついたヒノキの枯木の伐倒、枯木倒木の処理の多さ、そして急斜面の笹藪刈りなど難しい作業に加え、土砂崩壊や土砂崩壊の恐れ箇所もあり、実作業によりこのゾーンの問題点・課題などが見えてきた。

これからも実作業を通じて、各ゾーンの問題点・課題が必ず生まれる。しかし、一方で思いがけない生きものとの出会いの喜びもあり、問題点のひとつ山ひと山ごと知恵と工夫から乗り越えていくことができると今では実体験から感じとれる。

## ②森の見学

“これまでの10年”で施業したヒノキ1.7ha人工林の間伐後の年度ごとの森の変化、森の中のコアジサイの群生やアカマツを再生した周辺間伐の様子、間伐材活用の土留め、ヒ



ノキ 1.7ha 人工林から出る貯水のため池と橋脚などを視察した。その後、“これからの 10 年”で施業する 5.66ha 人工林の現状(枯木の多さやフジつるの巻き付きなど)や植生状況、施業後の森の構想などについて、現地で説明が行われた。

最後に、里山サテライトに戻り、総括がなされた。

